



「親知らず」って、どうしていうの

親の知らない歯だから「親知らず」

「親知らず」というのは、口のいちばんおくに生える歯のことです。

人間の場合、子どもの歯の乳歯から、大人の歯の、永久歯に全部生えかわると、全部で32本あることになっていますが、この中に親知らずも入っています。

この歯は生えるのがおそく、16才ごろから生えはじめ、30才くらいで生えおわります。昔は50才くらいで死ぬ人が多かったため、この歯が生えるころには、もう親が死んでいることが多く、それで親を知らない歯、つまり「親知らず」とよばれるようになったということです。

「親知らず」が生えるとき痛いのは

「親知らず」が生えるとき、よくその部分の歯ぐきがはれて、痛むことがあります。

それは、現代の人が、熱を通した、やわらかい物を食べるようになったために、歯が小さくなったり、退化しつつあるのと同じように、あごも小さくなって、「親知らず」の生える場所が、せまくなったためです。

「親知らず」の生える場所がせまくなると、「親知らず」が、ななめや横になって生えてきたり、半分以上、歯ぐきでかくされたままのことがあります。すると、食べ物のかすが、歯と歯ぐきの間に入ったり、かみ合わせのときに、歯ぐきに傷をつけたりするため、そこがはれたり熱を出したりして、痛むことになるのです。

「親知らず」の近くが、たびたび痛むようなら、お医者さんにその歯をぬいてもらい、治りようしてもらう必要があります。（監修・保志 宏）

